横須賀日日新聞
YOKOSUKA NICHINICHI SHIMBUN
市民記者がつくる
横須賀日日新聞©
INDEX
2 旧街道ただいま踏破中
3 申から　酉へ
4 千歯こきで脱穀体験
発行所：神奈川新聞横須賀支社 〒238-0004 横須賀市小川町21-9 TEL.046(822)2020 FAX.046(823)3845 yokosuka@kanagawa-np.co.jp
神奈川新聞のご購読申し込みはフリーダイヤル 0120-446-709。1週間のお試し読みも受け付けています。購読料1カ月3,189円
第57号
平成28(2016)年12月4日発行

あなたが地域の主人公 20

脳卒中者の集いで

役割担うことの大切さ

7月号で紹介した「全国脳卒中者の集いin横須賀」が県立保健福祉大学で開かれた。当事者が中心になって行われる大会は、運営が困難で過去5年間開催されなかった。「横須賀片マヒ希望の会」会長の妻沼祐一さんが、全国大会を横須賀で開催すると手を挙げ、実行委員長として大変なプレッシャーの中で開会されたことに敬意を表したい。

今回のテーマは「災害時の脳卒中者支援」。熊本地震の事例と横須賀の活断層の状況などが紹介された。脳卒中者に限らず、災害時に於ける障がい者や高齢者の困難な状況が浮き彫りになる貴重な機会であった。また基調講演者の日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会理事長・長谷川幹先生は、脳卒中者の回復に必要なのは「外へ出ること、生きがいを持つこと、役割を担って動くこと」とさまざまな事例をもとに力説された。

9月号で熊本地震の支援に行ったことを報告した。熊本YMCAが指定管理者として運営する避難所「益城町総合体育館」で役割(ボランティアコーディネート)を担ってきた。それほど大きな仕事をしてきたわけではないのだが、その経験を話してほしいと池上町会の防災訓練に役割を担うことの大切さ招かれ、自分なりに避難所の実際を伝えたい(避難所運営の難しさを感じたのは、最終日に市内の小規模避難所の見学に行った時のこと。益城町の総合体育館は1300人が収容された大規模避難所だが、そこは200人程度の小規模避難所。多くの物資や支援は大規模避難所に集まり、なかなか小規模避難所に回ってこなかったと初期の苦労話を聞かせていただいた。

11月13日、池上町会の地域住民が集まった防災訓練＝市立池上中学校。この後、「熊本地震の避難生活から学ぶ」と題して講演した

だが小規模には小規模の良さがあり、自然と避難者の自治組織ができていったという。大規模避難所の運営はどちらかというとすべて行政や施設運営者、ボランティアの手によってなされていたが、小規模避難所は自分たちでやろうという機運が高かったという。どちらが良い悪いではなく、避難所運営は千差万別だということ。

熊本の避難所で一番驚いたのは、熊本出身のコロッケさんが慰問でいらした時のこと。段ボールで出来た個室の中から高齢の方々がたくさん出て来て、サインをもらうために30分以上隣の方々と談笑しながら並んで待っていた。ラジオ体操やイベントにお誘いしてもなかなか外に出て来ない、引きこもりになりがちな高齢者、障がい者の方々が外に出て来たのだ。

外へ出ること、役割を担うことの大切さをつくづく感じた。

(横須賀市立市民活動サポートセンター館長・高橋　亮)

横須賀日日新聞　第57号
2016年12月4日

あなたが地域の主人公　20

テーマ：脳卒中者の集いで
（役割を担うことの大切さ）

※許可を得て掲載しています。